

雜
錄

アームストロング氏著「日本儒教の研究」(R. C. Arm-

strong: Light From the East; Studies in Japanese Confucianism) を評す

姊崎 正治

アームストロング氏が此の書の中に論じた日本の儒教といふ問題は、世界學者の注意を要すべき問題であるに係はらず、從來全く忽せにせられて來たのであります、然るにアームストロング氏が此の問題を捉へて論じたと言ふ事は、それだけでも吾人は感謝せなければなりません。著者は、此の著述をなすに至つた動機は、日本人の倫理道德の源を研究して以て、日本人をよく了解せむ爲であると言つてをります。かゝる著者の動機と、此の問題の實際興味あり困難である點から見、吾

人は著者に尊敬を拂い度いと思ひます。

凡そ儒教が東洋人の道德的生活と道德的觀念とを造るに如何に與つて力あつたかは申すまでもありません。儒教の建設者たる孔子は、實行的思想家として決して空理空論を説いた人ではありません。然し又著者の言ふ様に、孔子は少しも形而上學的方面を説かなかつたと言ふ事も出来ません。儒教には大體二つの特徴があります。第一は支那の世界觀と倫理とを結び付けた點で、此の結果人間の生命は結局天道に合するものなりと説いたのであ

ります。第二は倫理と政治とを結び付けた點で、此の結果は市民道徳を非常に重んずる事となつたのであります。かくして支那に於ては、種々の方法で儒教は發達しましたが、其の中最重要なものは、宋時代即十二世紀に於ける儒者によつてなされた解釋であります。元來儒教は、その世界觀たる天の思想と實踐倫理との間に幾何の溝渠の存するものであります。彼等宋朝の儒者は此の溝渠を除く爲に心理説を用ひました。此の心理説を用ひた理由も、要するに精神修養に對する材料を與へ、以て天理と人生とを密接に關係させ、哲學的眞理を道徳中に取り入れむとしたに外ならぬのであります。

此の宋時代の儒教は、其の後徳川時代の始めに政府に採用され、武士の道徳的生活の中心となつたのであります。殊に當時政府の採用した儒教は所謂朱子學派の儒教であります。朱子學は服従の道徳を力説したので、その哲學は世界を靜的に觀察し、其の道徳教は殆ど無活動の極端までも至らむとし、時としては偽善に流れむとしたほどであ

ります。此の朱子の學説は、當時平和と秩序とを維持せむとする徳川政府に取つて、最も其目的に適つたものであります。然しながら、獨創を學び進取を重んずる人々には、逆も満足を與へる事は出来ませんでした。此等の人々はかの陽明學に赴いたのであります。王陽明は十六世紀の理想派の哲學者で其の説は朱子と全く反對であります。彼れの觀方は總て動的で、その理想實現の方法として、直覺即内觀を説いたのであります。日本に於て王陽明を奉じた人々は、一の理想派を立てたのであります。而して、彼等は内觀によつて心的活動を強くし、その結果生ずる力ある生活の中に、道徳を實行したのであります。此の陽明學派の他にも、朱子一派の靜的觀方と其の無活動とに反對して、色々の説を立てたものもあります。

此等の人々の説も種々様々であります。其の哲學上心理上倫理上の學説は大切なもので、著者も此の書の終りに之を説いてをります。然しながら、之と同様に重要で且つ學問上興味ある點を忘れてはなりません。即一には彼等思想家に對する

時代の影響と、其の平和な保守的時代に對する彼等の反動とであります。この二つの點は、日本の儒

者を社會的方面から觀察する方法で、彼等の教義と生涯とを觀察するに必要な點であります。私は今茲に此等の點を論じやうとは思ひませんが、著者は此の大切な點を見逃して居るのであります、彼等儒者は日本語で書いたり漢文で書いたりして居りますから、此の文意を了解する丈けても可成り困難な仕事であります。又彼等は其の書の中に、哲學上心理上倫理上の概念を擧げて居りますが、これが又西洋で用いる概念とは異つてゐるのみならず、概念を正確に定義した場合は殆どありません。例へば智的觀念が情を表はす語に關聯したり、倫理上の考察が社會事情や政治問題と關聯して居る如きであります。此等の概念を悉く明瞭に理解する事は、最困難な仕事で、著者も此の理解には缺けて居るのであります。著者が此等の概念を、西洋で用ひる概念に當て嵌めずに置いた例は少くありません。然しながら、斯かる研究に對して、先人未開の地を拓いた著者に取つては、

無理ならぬ事て、兎に角、著者の成功を認めねばなりません。

次に此の書を實際讀んで見ると、其の大部分即第二章乃至四章は井上教授の三著、即「日本朱子學派の哲學」『日本陽明學派の哲學』及「日本古學派の哲學」との三書を抽象し譯出したもので、著者も第十二頁に於て、此の三書を參考書の中に數へ、著者自身此等の書に負ふ所が大なるを述べて居ります。私は此の著者を、井上博士の前三書と、殆ど一頁毎に比較しましたが、大體に於て、著者は前三書を縮小して譯出したのであります。勿論著者自身も、井上博士の説として引用して居る部分も少くはありますが、時として著書自身の説の如く述べて居る部分も、殆ど總てが井上博士の説其の儘であります。甚だしきは、中江藤樹の説に類似した説として、ウバニシャツドとヨハネ福音書とを擧げて居るなども、全く井上博士の書と同じであります。然るに著者は、井上博士の説を其の儘引用したのでなく、非常に之を縮小して引用した爲に、大層誤謬を生じた部分があります。例へ

ば熊澤蕃山が

儒道をこらて佛法たえずば、終に吉支丹の爲に奪はれぬべきか。然らば、神道も儒道も、盡く打ち破られて、畜生國となり、禁中もなくなるべし云々。

と言つて居る文を略して仕舞つて、蕃山は元來は基督教の長所を認めながら、之を時としては悪く言つた様に説き、『蕃山も其後キリスト教に就て、更に研究して得る處があつた様に思はれる』と言つてをります。此等は著者が井上博士の原書を省略した爲に生じた、大なる誤謬の一でありませぬ。斯くの如く、著者は井上博士の説を全く縮小したに過ぎないのでありますから、この書を論ずるに際しては、どうしても、兩者を比較して話さなければなりません。勿論材料の取捨選擇等に關しては、原書たる井上博士に責任があり、之を縮小し翻譯して、多少自己の説を附加した點に就ては、アームストロング氏自身が責任を負はねばなりません。先づ第一論すべきは、何故に著者アームストロング氏が、井上博士の原書を大體に亘つて翻

譯し、以て歐米人の理解に適する様にしなかつたかと言ふ事でありませぬ。井上博士は、勿論日本人に讀ませる爲に、前三書を書かれたのでありますから、儒教の大要、朱子王陽明の特徴、及儒教の傳つた當時の日本の社會狀態に關しては、日本人は略之を知つてゐるものと見做して、書かれたのであります。然るに、かゝる儒教に對する一般的知識は、歐米人には讀まれませんから、若し歐米人に讀ませむ爲の書であるとしたならば、一定の配景法に據らねばなりません。井上博士の原書には、儒者の生れた村の名や、其人が受けた俸祿の額などが記してあります。此等の事柄は、日本人が讀めば興味があります。西洋人が讀めば何の興味もありませんから、此學の細かい點や、又あまり有名でない人の記事は全然省略して、大儒者だけを説明すればよかつたのです。即日本の儒者の人格を説明するに、必須缺くべからざる特徴を掲げればよかつたのです。然るに、著者は一々細かい點までも書いた爲に、大體を捕へるのに、讀者を迷はせるのが多いのであります。又著者は一

句一句原書の通り譯出した爲に、往々讀者を岐路に導く憂があります。要するに、著者は大儒者の説をざつと一通り省略せずに擧げて、小儒者の説を全部省略したならば、もつと筋途が立つて、終始一貫した事だらうと思ひます。著者が、斯くの如く材料の選擇を誤まり、儒者の言を引用する事に注意を缺いたのは、此の書の價値を傷けるものであります。

先づ此の書の外形に就ては、これ位であります次に内容を見ますと、彼等儒者の哲學のみを力説して、之と相伴つてゐる他の説を顧みなかつた結果、誤りを生じてをります。著者は、哲學上世界觀上で説く『理』とか『氣』とか言ふ問題にのみ注意して、心理學説を全く忽せにしました。此等の『理』或は『氣』は、日本人の精神修養や心的活動の上に大なる關係を有したもので、日本の儒者の間では、この精神方面が、實行道德の缺くべからざる條件と見做されたのであります。著者は、日本の儒者に關してのみならず、朱子に就ても、其の心理學説を看過して居ります。この點は、極めて重要な

點で、朱子及其の他支那の儒者が、佛教の影響を受けたと言ふ事を見るにも、又日本に於て、道德生活と心的活動とが結合して、一種特色ある倫理を構成したと言ふ事を知るにも、この點を忽せにする事は出来ないからであります。然るに著者は、殆ど此の重要な點を論じて居りません。

著者が此の點に注意しなかつた事は、到る處其の例に乏しくはないのであります。抑も陽明學派の儒者のみならず、朱子學派の人々も、此の精神的訓練に重きを置き、精神的訓練の方法として『工夫』を説き、又根本的活動力を養成する事を『存養』と名けてをります。然るに著者は、朱子學派の倫理を説くに當つて、存養の一節を省略して居ります。井上博士の原著では、『仁の説』『存養の説』『死の説』と言ふ順序に説いてあるに係はらず、著者は『存養の説』だけを省いてをります。これは著者の非常な誤と言はねばなりません。凡そ儒學に於ける心理學説は、其の哲學と倫理とを結ぶ鎖の様なものであるから、此心理學説を省略したならば、兩者の關係は殆ど絶たれたも同様であります(未完)